

猪木 武徳 『経済思想』

【技能形成】

瀧井 克也

1987年に出版された猪木武徳氏の『経済思想』を紹介してほしいという依頼があった。自分の人生を変えた一冊を、若い人にも知ってほしいという誘惑にかられ、執筆を引き受けた。だが、著書を読みかえしてみても、引き受けたことを後悔した。難しい。それは、名作と呼ばれる小説を要約することの困難さに似ている。周到に考え抜かれた構成、さまざまな論点への細やかな配慮、そして適確な表現で著者の主張へと緩やかに導くバランス感覚。これら全てが、『経済思想』を名著たらしめている。加えて言えば、『経済思想』という著書そのものが、これまでの数多くの思想家の考えを著者独自の切り口で要約・整理・配置しながら議論を行っている本である。専門家でもない私がさらに要約することは、私の能力をはるかに超える。

迷った結果、次のような結論に至った。本書の章立ては、第1章：市場の秩序、第2章：政府の役割、第3章：貨幣と信用、第4章：消費・生産・商業、第5章：経済学と社会主義、第6章：労働・知識・自由となっており、経済学的全領域にわたる。ただ、今回のテーマが「現在の労働問題を考える上で改めて読んでおきたい文献」であることや字数制限があることに鑑み、以下で紹介するのは「知識と経済的自由」と題された第6章6.2節の内容に絞ろうと思う。一つのテーマだけでも深めたほうが、『経済思想』の魅力を伝えやすいのではないかと思うからである。

本論に入ろう。『経済思想』の背後に潜むテーマを一言で述べるならば、「個人の自由な選択の保障と望ましい社会的秩序の形成はどのように両立しうのか」ということであろう。この問題意識は、その後の著者の書籍にも一貫して流れている。この問題意識を軸としながら、『経済思想』ではさまざまな主題が適切に配置され議論されている。その中で、第6章6.2節は、知識獲得の方法がどのように上記テーマに影響を与えるのかを述べた章である。第6章6.2節の位置づけを理解するために、まずは、市場の秩序について

議論している第1章の中で述べられている言葉を引用しよう。

「市場秩序に関心をいだき、それを擁護しようとする者には、人間の知識と理性の限界は避けがたい事実であり、それゆえにこそ自由の原理と正義のルールが必要となるのであるが、「理性による計画」の可能性を信じ、そこから生まれる秩序を賞賛する者には、市場社会の欠陥がより強く意識される。この両者のいずれに与するかは、人間の知識の性質やその不完全性についてどう考えるかに依存してくる。そして現実の社会の中で知識はどのような様式で存在し、交換され使用されているのか、という点が判断の分れ目になる。実はこの点は、経済体制や自由の問題の基礎をかたちづくっており、避けて通ることはできないため、特に第6章6.2節・6.3節で改めて述べることにしたい。」

このように、本書は第1章で提示された問題に最終章で答えるという構成となっており、第6章6.2節・6.3節が本書において特別な意味合いを持っていることが窺い知れる¹⁾。

それでは、第6章6.2節の内容を具体的に見てみよう。さまざまな知識獲得にかかわる議論の実例を挙げたのち、著者は言う。「ここで注目しておきたいのは、一般的な知識、特殊な知識、法則定立的方法、個別事例研究の方法、という二本の線は、人間の知識獲得方法、知識の分類方法として古くから流れの尽きることがなかったという点である。」そのうえで、中世哲学以来続く普遍論争に言及しながら、「名目と実在をめぐる普遍論争は、このように精神の外にある対象が個別的であり、一方において人間の概念が普遍的であるとすれば、両者の間にどのような関係があるのかという点に集中していたといつてよい。」と知識獲得の二つの型が生まれる根拠を、人間の認知能力の特質との関係でまとめている。

続けて言う。「このような個別と普遍、実在と思惟

の問題を、現代科学の分野でより具体的に展開したのは、M. ポラニーであった。」そして、ポラニーが「一見普遍的、一般的と映る科学的知識も、その最重要部分はきわめて個人的なものであるということ」を見出したことを高く評価する。以下、著者が『経済思想』で重要視しているポラニーの主張を、ここで簡単にまとめておこう。

ポラニーは、人間が認知できる知識には言語化できない知識「暗黙知」があるということを強調する。猪木氏は「暗黙知」の存在は産業社会の中での技能の形成とも深いかかわりのある問題であるということを描きながら、ポラニーが技能について記載している部分に着目する。産業現場における技能が「完全に特定化、あるいはマニュアル化できないということは、それを伝える方法は“例示”や模倣にかなりの程度依存しなければならないことを意味する。」そのうえで、「重要なことは、この「技能のルール」自体が、教えている親方自身明示しうる形では知りえないものを含んでいる、ということである。知らない限り「無批判に」模倣することによってしか隠れた「技能のルール」は伝えられない。」と述べ、ポラニーが「暗黙知」の伝承において、権威や伝統に従うことの重要性を記したことを指摘する。

こういった「暗黙知」の特質を前提として、著者は知識と経済組織の関係の議論に踏み込んでいく。著者は言う。「定義できない知識が存在するからこそ、現場の人間がもっている知識や技能を完全な形で収集・管理し、適切に散布して行くという仕事を、マネジメント（すなわち現場で実際に機械や道具・制御装置を使っていない人）が遂行していくことはできない。」では、企業におけるマネジメント層の役割とは何であるのか。著者はフランク・ナイトが『危険、不確実性、利潤』の中で論じている「知識の管理」について言及しながら、「むしろこれら重役層の重要な役割は、企業のコントロールに関する実際的意思決定のかなりの部分を担う確かな部下を、いかに選抜するかという点にある。」と述べる。『経済思想』に記載されているナイトの議論をもう少し紹介しよう。

著者は、「ナイトは一般に“未熟練”とみなされる単純労働でも子細に観察すれば、つねに機械の調子、材料の不均一性など「正確には予想できない偶然性、不確実性」に直面していることを強調する。」と主張する。そのうえで、次のように述べる。「しかしナイ

トは次の点に注意をうながす。すなわち、原材料の不均一性や機械の調子等の理由でオペレータの仕事が完全にルーティン化できなくても、非定常的な仕事に対処しうるオペレータの能力自体をかなり正確に判別することは可能であると。」そこから、次のような結論が出てくる。「ナイトの主張は、重要な意思決定は意思決定を委譲できる主体を選ぶことであり、その他の意思決定や判断は自動的にルーティン化される性質のものであると要約できる。」

その後、著者はハイエクの述べた「その場・その時の特殊な状況に関する知識」と「暗黙知」の近似性について触れながら、「現場の人間」が暗黙知として数多くのことを身につけ知っているものの、その知識や技能を直接に監督者や計画者が管理することができないということ、この点を認識することはきわめて重要である。」と結んでいる。

この『経済思想』第6章6.2節で紹介されている議論の意義は、同時代に書かれた別の名著 Milgrom and Roberts (1992) と比較してみることで、より明確になるかもしれない。Milgrom and Roberts (1992) は、『経済思想』と同様に「個人の自由な選択を認めたいという問題意識を色濃く反映している本である。一方、そのベースとなる理論は、『経済思想』で一般的な知識、もしくは法則定立的方法として分類された経済理論、特に契約理論であるという点が『経済思想』と異なっている。本書の特筆すべき点は、緻密なロジックをできる限り数式を使うことなく、ケーススタディに基づく事例をふんだんに紹介しながら直感的・論理的かつ体系的に説明しているという点にあり、現実の組織構造についての経済学的解釈を理解するうえで、最良の書として、契約理論の立場から組織分析を行いたいと考える人々にとっての古典的名著となっている。

「暗黙知」の存在は、契約に記述できない事項を生み出すため、契約理論においても重要な問題として取り上げられてきた。当然 Milgrom and Roberts (1992) においても詳しく説明されている。具体的には、「暗黙知」が存在し契約を書くことが困難な状態において望ましいインセンティブ付けをするために何ができるかについて、功利主義的な厚生関数を用いて分析された理論蓄積をもとに²⁾、評判形成、長期的関係、所有権の配分といったさまざまな制度的工夫の長所と短所

が適切に紹介されている。

一方、『経済思想』は一般的な知識や法則定立的方法の価値は認めつつも、その限界を理解することの重要性を指摘し、現場を知らない知識人が犯しがちな過ちを防ぐためにも、特殊知識や個別事例研究の方法のもつ大切さを強調するという立ち位置を取っている。そのため、『経済思想』が実地調査を大切にしている研究者から共感を持って迎えられたとしても不思議ではない。実際、数多くの現場観察を踏まえて、現場労働者の変化への対応能力の大切さを説いた小池和男氏の「知的熟練」の議論は、「暗黙知」にかかわる上記議論との親和性を見て取ることができる。小池・猪木(1987)にもボラニーやナイトに関する同様の記述がなされ、「知的熟練」の議論がその前後に確立してきたことを考えると、小池氏が「知的熟練」を概念化する際に猪木氏の影響があったであろうことは想像に難くない。この意味では『経済思想』で議論された「暗黙知」の記述は「技能の内実」を深めたいと考える研究者に特に支持されてきたといえるかもしれない。

この「技能の内実」との関連で『経済思想』の第6章6.2節では、具体的な労働問題についても言及している。

「ブルーカラー、ホワイトカラーを問わず、定型的・繰り返しの仕事はますます電子機器に置きかえられているが、残された職務は単純作業と頭脳作業に分極化するのではなく、むしろ「仕事の複合化による高度化」が進行するというのが一般的傾向である。……実は「定義できない知識」「暗黙知」が存在する限り（これが無くなることが経済学でいう「完全情報」という理想郷 (never-never land) の必要条件のひとつなのだが）、機械による労働の完全代替はありえない。」

ITの進展がどの程度労働を代替していくのかという論点は、現在でも多くの議論が続けられている。その中でも、猪木氏の主張との比較の意味では、Autor, Levy and Murnane (2003) が参考になる。Autor, Levy and Murnane (2003) は、仕事を非定型労働か定型労働かという視座と、知的労働（分析的・相互依存的）か肉体労働かという視座から分類し、コンピュータ化が定型の労働全般に対する労働需要を減少させる一方、非定型タイプの知的労働に対する労働需要を増加させることを発見した。日本においては、池永 (2009) や Ikenaga and Kambayashi (2016) が同様の傾向を

報告しており、こう言った傾向はIT化に伴う一般的な傾向であると考えられる。

猪木氏が現場で観察してきた「技能の内実」と Autor, Levy and Murnane (2003) のデータが示すタスクに必要な技能がどの程度一致しているのかという難しい問題はあるが、機械が定型的な仕事を代替するだけでなく、非定型な仕事を増やすという点は、IT化に伴い、変化に対応できる能力がより重要となると主張する猪木氏の現場観察と整合的にも思われる。もっとも、現場の生産労働者においても非定型なタスクを処理する能力が、IT化によってより重要になっているとまで主張できるかどうかについては、上記論文の枠組みの中では答えることが困難である。今後の研究が期待されるテーマといえるかもしれない。

いずれにしても、非定型な知的労働に対する需要の増大は否定しがたい。このことは、非定型な知的労働の「技能の内実」は何かという興味深い問題を提起している。実は、この点においても「暗黙知」の概念は役に立つ。事実、ボラニーの議論は、知的労働の代表格と考えられる科学の分野においても、「暗黙知」が重要な要素を占めていることを主張したことに大きな特色がある。ボラニーは言う。

「しかしプラトンは『メノン』の中でこの矛盾を指摘したのであった。彼は、問題にたいして解答をさがしもとめることは不合理であるという。なぜなら、さがしもとめているものを知っているとすれば、その場合には問題など存在していないことになるし、また、もしそうでなければ、さがしもとめているものがなにかを知らないのだから、なにを見出すことも期待することができない、というのである。……『メノン』のパラドックスを解決することができるのは、一種の暗黙知である。それは、かくされてはいるがそれでも我々が発見できるかもしれないなものかについて、我々もっている内観である。」(Polanyi 1966 = 1980 より)

このボラニーの主張は、知的生産の根幹に位置する問題発見能力の背後に「暗黙知」が横たわっていることを示唆している。そうであるならば、『経済思想』の第6章6.2節が問題としていた「暗黙知」を骨格とする技能を、監督者や計画者はどこまで管理することができるのかというテーマは、今後も重要な論点として残り続けることになる。

それでは、猪木氏自身は急速に進んだ知的労働に対する需要の増大をどのようにとらえていたのでしょうか。残念ながら『経済思想』の中にその記述を見出すことは難しい。むしろ、『経済思想』出版から10数年後の2001年に出版された『自由と秩序——競争社会の二つの顔』の中に、この点についての猪木氏の考えを理解するヒントが書かれている。その内容を簡単に紹介しておこう³⁾。

猪木氏は『自由と秩序』において、日本では専門家の軽視が進んでいると警告を鳴らしている。ここでいう専門家とは、ある種の知的労働者であり、現実社会を分析し、「言葉化」するスキルに長けた人々のことである。そういった専門家が必要となる1つの根拠として、猪木氏は現代のグローバルな社会における競争の特質に注目する。グローバル社会の進展とともに、世界に向けて根拠を挙げて自国の立場を説明することのできる人材が極めて大切となってきているが、現代の日本社会において、こういった役割を果たせる人が不足しているというのだ。こういった指摘は、「暗黙知」の重要性を説いた『経済思想』の精神と矛盾するものではない。むしろ、「暗黙知」が完全には共有され得ない人々との間でも、秩序を協力して維持していく必要があるという民主社会そのものの抱えるの難しさ⁴⁾を直視し、その場合「言葉」を尽くして議論する以外に道はないのだという著者の姿勢を示しているように思われる。

そろそろ文章を終える時間がきたようだ。最後に思い出してほしい。私は、第6章6.2節の内容しか紹介していないということ。そして目を閉じ、想像してほしい。他の章や節においても、同様に深みのある議論がなされ、第6章6.2節がその1ピースとして全体の整合性を保ちながら、適切に埋め込まれている一冊

の本を。それが『経済思想』である。

猪木武徳 (1987)『経済思想』岩波書店。

- 1) 第6章6.3節は「自由の根拠」と題されており、自由は何のために擁護されなければならないかについて、圧巻の迫力で議論を行っている。
- 2) 功利主義に基づく計画化の問題点と関連して、『経済思想』においては、第2章では効用比較の難しさを、第6章6.3節においては自由の価値を評価することの難しさを議論している。興味のある方は参照されたい。
- 3) 私はかねがね、『経済思想』と『自由と秩序』は一緒に読むことで、著者の真意がよりよくわかると考えている。
- 4) 民主社会そのものの抱える難しさなどのように向き合っていくかという点について、猪木氏の問題意識をより深く理解したい読者は、『自由の条件——スミス・トクヴィル・福澤論吉の思想的系譜』を併せて読むことをお勧めする。

参考文献

- 池永肇恵 (2009)「労働市場の二極化——ITの導入と業務内容の変化について」『日本労働研究雑誌』No. 584, pp. 73-90.
- 猪木武徳 (2001)『自由と秩序——競争社会の二つの顔』中公叢書。
- (2016)『自由の条件——スミス・トクヴィル・福澤論吉の思想的系譜』ミネルヴァ書房。
- 小池和男・猪木武徳編 (1987)『人材形成の国際比較——東南アジアと日本』東洋経済新報社。
- Autor, David H., Frank Levy and Richard J. Murnane (2003) “The Skill Content of Recent Technological Change: An Empirical Exploration.” *Quarterly Journal of Economics*, Vol. 118, No. 4, pp. 1279-1333.
- Ikenaga, Toshie and Ryo Kambayashi (2016) “Task Polarization in the Japanese Labor Market: Evidence of a Long-Term Trend.” *Industrial Relations*, Vol. 55, No. 2, pp. 267-293.
- Milgrom, P. and Roberts, J. (1992) *Economics, Organization and Management*, Prentice Hall, Inc.
- Polanyi, Michael (1966) *The Tacit Dimension*, Routledge & Kegan Paul Ltd, London. (=1980, 佐藤敬三訳『暗黙知の次元——言語から非言語へ』紀伊國屋書店)

たきい・かつや 大阪大学大学院国際公共政策研究科教授。主な論文に“Prediction Ability,” *Review of Economic Dynamics*, Vol. 6, No. 1, pp. 80-98 (2003年)。人材配置の経済学専攻。